

# オンライン英会話サービスを活用した英語授業の実践

## —会話力の客観的評価とオンライン英会話サービスを採り入れた授業運営の試行—

福與喜弘・高塚敬子（NTTラーニングシステムズ㈱）

概要：外国語教育では4技能（読む・書く・聞く・話す）の総合的指導，評価が一層求められているが，現在，中学生の多くは週4時間程の授業以外で会話する機会は皆無に近い。今回，英語授業の中で生徒が外国人講師と遠隔で英会話を行い，活きた英語コミュニケーション機会を得ることが，会話力と学習意欲にどの様に影響するか検証した。その結果，生徒の会話力が有意に高くなり，学習意欲の向上が確認された。

キーワード：遠隔教育，英会話，オンライン，タブレット，評価

### 1 はじめに

外国語授業の中で，学習者と外国人講師が遠隔で会話する取り組みが始まっており，発話量確保の観点から，マンツーマン型，グループレッスン型等の形態が存在する。いずれも学習者にポジティブな意識変容が見られることが報告されている。

本実践では，中学校でタブレットを活用して外国人講師と生徒がグループレッスン型でオンライン英会話を行うことで，生徒の会話力の伸びと意識の変容に有意差が認められるかどうか等を検証した。

### 2 研究方法

#### （1）目的

オンライン英会話実践の効果として，以下を確認する。

①「構文」，「語彙の聞き取り」，「流暢さ」，「単語の意味」，「発音」の5観点で，会話力が向上したか

②英語に対する意識変容（意欲面，態度面，苦手意識）が見られたか

③オンライン英会話を採り入れた授業運営の課題

#### （2）調査対象および調査時期

北海道千歳市立勇舞中学校の英語教員2名及び3年生の5学級，計約170名の協力を得て，平成27年9月から翌年1月まで実施した。

#### （3）実践内容

各対象学級で5回，計25の英語の授業で，生徒が外国人講師と遠隔で英会話を行った。

#### （4）検証方法

##### ①会話力テスト

前述の5観点と，これら項目から算出される「総合」の全6項目（各観点50点満点）でのスコアを構成し，実践前と全ての実践終了後の生徒毎の得点結果を比較，評価した。

##### ②意識調査

意識変容（意欲面，態度面，苦手意識）を問う設問を構成し，リッカート尺度による4件法（わりにそう思う：4点，ややそう思う：3点，あまりそう思わない：2点，ほとんどそう思わない：1点）又は該当項目を複数選択する形式で問い，実践前と全ての実践終了後の結果を比較，評価した。

#### （5）活用したツール

オンライン英会話サービスとして，NTTラーニングシステムズ㈱が提供する「バーチャル英会話教室」を活用し，TOEIC等でネイティブスピーカーとして認定されている外国人講師を配

置した。会話力テストは、電話にて受験し、ランダムな質問に回答する形式の英語コミュニケーション能力テスト「Versant™ Junior English Test」（ピアソン・ジャパン株）を採用した。

### （５）授業方法

#### ①グループ構成

授業では生徒を5グループに分け、グループに外国人講師1名を配置した。生徒2名1組で1台のタブレットからオンライン英会話サービスに接続し、外国人講師と交互に各生徒10分程度会話した。

#### ②会話のトピック

各回の授業テーマは順に以下の通りである。

- ・自己紹介を聞き取り、名前の綴りを尋ねる
- ・外国人講師の旅行経験について詳しく聞く
- ・外国人講師にプレゼンを行い質問に答える
- ・特定の文法を用いたクイズに答える
- ・入試問題形式を意識したクイズに答える

各授業で話すトピックは、あらかじめ教員にて検討後、外国人講師及び生徒に伝えられた。

## 3 結果

### （１）会話力テスト

実践前後に行った会話力テストの全体のスコアを用いて対応のあるt検定（片側検定）を行った結果を表1に示す。

「語彙の聞き取り」、「構文」、「総合」においては有意差が認められ、「単語意味」、「流暢」、「発音」では有意差が認められなかった。

表1 会話力テスト結果（全体）

項目	前 n=162	後 n=162	p値	効果量d	判定
総合	35.17(7.5)	36.16(7.6)	.013	0.13	*
構文	29.27(10.1)	30.53(9.3)	.032	0.13	*
語彙聞取	32.19(9.6)	34.54(8.8)	.000	0.26	**
単語意味	32.48(9.8)	33.91(10.4)	.075	0.14	
流暢	42.26(9.0)	42.48(8.6)	.348	0.03	
発音	39.09(8.2)	38.11(9.4)	.066	0.11	

平均値(標準偏差), \*:p<.05, \*\*:p<.01

### （２）意識調査（意欲面）

実践前後に行った意識調査のうち意欲面について、対応のあるt検定（片側検定）を行った

結果を表2に示す。

全14項目中13項目で有意差が得られ、唯一、「英語の授業に集中して取り組んでいますか」では有意差が認められない結果となった。

表2 意識調査（意欲面）の結果

項目	前 n=121	後 n=121	p値	効果量d	判定
英語が好きですか	2.82(0.96)	3.07(0.90)	.000	0.27	**
英語が得意ですか	2.18(0.99)	2.40(0.97)	.000	0.23	**
英語の聞き取り(リスニング)に自信はありますか	1.99(0.82)	2.74(0.77)	.000	0.94	**
英語を話すことに自信はありますか	2.01(0.79)	2.62(0.75)	.000	0.79	**
英語で会話することに抵抗がありますか ※逆転項目	2.56(0.88)	2.74(0.91)	.023	0.97	*
英語を使ってもっと会話したいと思いますか	2.74(0.99)	3.09(0.96)	.000	0.36	**
英語をもっと学びたいと思いますか	2.94(0.92)	3.18(0.88)	.001	0.27	**
英語の授業に集中して取り組んでいますか	3.43(0.67)	3.54(0.73)	.067	1.16	
進んで英語の勉強をしていますか	2.66(0.83)	2.87(0.89)	.003	0.25	**
頭で整理してから英語を話していますか	2.53(0.85)	2.72(0.90)	.017	0.22	*
習った英語の単語や文法の振り返りをしていますか	2.56(0.83)	2.80(0.85)	.000	0.29	**
英語について先生等に質問していますか	2.12(0.93)	2.41(1.06)	.000	0.29	**
友達に英語での言い方を訊ねたり訊ねられたりしていますか	2.32(0.96)	2.64(0.01)	.000	0.47	**
外国や英語のテレビや音楽等に触れていますか	2.54(1.15)	2.77(1.07)	.003	0.21	**

平均値(標準偏差), \*:p<.05, \*\*:p<.01

### （３）意識調査（態度面）

実践前後に行った意識調査のうち、生徒の外国や英語に対する日常的な意識や態度について、表3の選択肢（複数選択）を提示し、選択した生徒の割合を前後で比較した結果を表4に示す。

表3 意識調査（態度面）の選択肢

選択肢	略称
「これを英語で何と言うのだろう」と考えることがある	英語で
英語を見かけると「何という意味だろう」と考えることがある	日本語で
習った英語のフレーズや英語の歌の歌詞を無意識に口にしていることがある	口に
簡単なことなら言いたいことが英語で自然に浮かんでくる	浮かぶ
英語での言い方が分からなくても、知っている英単語で何とか伝えることができている	何とか伝達
相手が外国人でも落ち着いて話すことができている	落ち着いて
外国のニュースを親で身近に感じる	身近
街等で外国人を見かけると、会話してみたくなる	話しかけ
英語が通じると嬉しい	嬉しい
英語で話すのが楽しい	楽しい
自分にとって英語の学習の重要性が増している	重要
他者に自分の意見を伝えることができている	意見伝達
人前で話すことは嫌ではない	人前
外国に滞在してみたい	滞在
将来、外国や英語に関する仕事をしてみたい	仕事

表4 意識調査（態度面）の結果

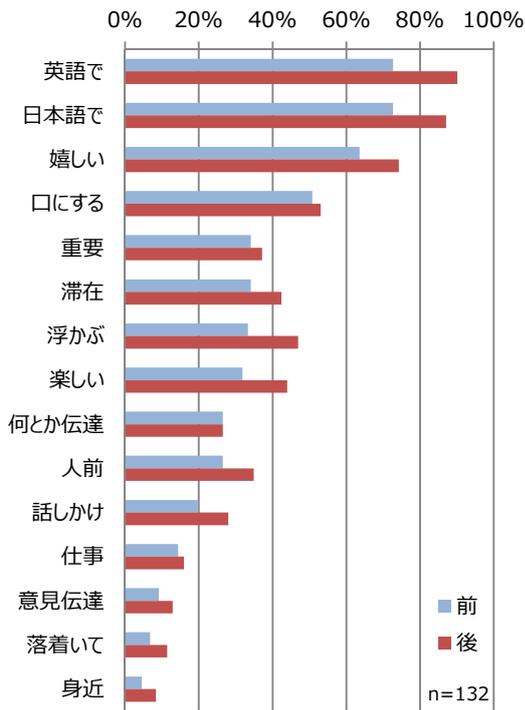


表3に示す全15の選択肢中、「英語での言い方が分からなくても、知っている英単語で何とか伝えることができる」を除いた全項目において、選択した生徒の割合が事前に比べて大きくなっている。

(4) 意識調査（苦手意識）

実践前後に行った意識調査のうち、生徒が英語を話す際に困難と感じる点について、表5の選択肢（複数選択）を提示し、選択した生徒の割合を前後で比較した結果を表6に示す。

表5 意識調査（苦手意識）の選択肢

選択肢	略称
発音	発音
聞き取り	聞き取り
アクセント、イントネーション	アクセント
文法、語順	文法
自分の伝えたい思いやニュアンスに合った表現の選択	表現
聞き取れない部分を想像で補い理解すること	補完
相手の話の内容を受けた返答や質問	返答
熟語(慣用語、イディオム)	熟語
英単語	単語
既に学習した単語や構文の活用	活用
相手の声色やトーンに合った相槌	相槌

表6 意識調査（苦手意識）の結果

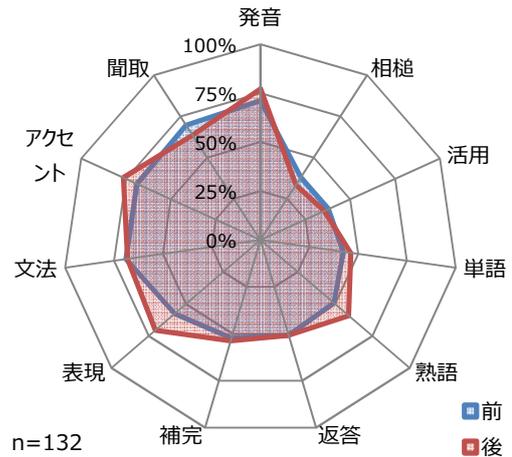


表5に示す全11の選択肢中、「文法、語順」、「聞き取り」等を選択した生徒の割合は事前に比べて小さくなり、「発音」、「アクセント、イントネーション」等を選択した生徒の割合は事前に比べて大きくなっている。

4 考察

(1) 会話カテスト

本実践を通じて、効果量は必ずしも大きくないが、「構文」、「語彙聞き取り」及び各観点から算出された「総合」の値においては有意差が確認された。「単語意味」、「発音」、「流暢」では有意差が見られなかったが、これは今回、単語習得を目的とした活動を行わなかった点や、生徒の発話を促進するために、会話中の外国人講師による発音のコレクションを積極的に行わなかった点が影響したものと想定される。

なお、度数が小さく参考値となるが、事前の会話テストの「総合」のスコアを用い生徒を上位層 (n=142)、中位層 (n=19)、下位層 (n=4) に分け Good-Poor 分析を行った結果、下位層は全項目で有意にスコアが高くなり、上位層は全項目でスコアに有意差が見られなかった。

これは、今回、生徒間の学び合いを促進するために、教員主導で習熟度の高い生徒と低い生徒でペアを構成し活動に取り組みさせたことが一因と考えられる。習熟度の高い生徒は、外国人

講師との会話を先行し、ペアに会話の見通しを与え、会話に詰まった際はフォロー役となり、結果として下位層の会話能力の底上げに貢献したものと考えられる。

### (2) 意識調査 (意欲面)

本実践を通じて、効果量は必ずしも大きくないものの、生徒は英会話への抵抗感を減じ、英語で話すこと聞くことに一層自信を持ち、こうした変容は最終的に、生徒が英語をより好きになるとの結果を導いている。

なお、「英語の授業に集中して取り組んでいますか」の項目で有意差が認められなかったが、これは、事前の時点から比較的評価点が高かったことが要因として考えられる。

### (3) 意識調査 (態度面)

検定等分析は行っていないが、各選択肢を選定した生徒の割合を前後で比較すると、概して生徒の英語や海外、外国人に対する順応、親しみといった意識の高まりが見て取れる。「英語が通じると嬉しい」、「英語で話すのが楽しい」といった項目からは生徒が実践を通じ成功体験を積み上げた過程が読み取れ、「海外のニュースを観て身近に感じる」、「海外に滞在してみたい」、「将来、外国や英語に関する仕事をしてみたい」といった海外志向的な項目や、「他者に自分の意見を伝えることができている」、「人前で話すことは嫌ではない」といった対人能力に係る項目における伸びから、生徒の国際感覚や多様な他者との協働が益々求められるこれからの時代に即した能力の育成に繋がっていることが分かる。

### (4) 意識調査 (苦手意識)

文法、語順や相槌、既習内容の活用に係る苦手意識の低下は、実際の会話では文法を意識せずとも思いの外伝わった経験や、聞き返しの表現を駆使して会話に心理的余裕を持つことができたこと等が影響しているものと考えられる。

一方、発音やアクセントに係る苦手意識の高まりは、外国人講師の発言のイントネーションや、相手に伝わる発音の難しさが、英単語や熟語、表現方法においては、語彙不足等により伝

えたいことが伝えられない、或いは相手の話す内容を解せない様な場面に遭遇したこと等がそれぞれ要因として挙げられ、総じて、会話において必須となる内容理解や表現に係る能力への意識が顕在化した結果とすることができる。

## 5 課題

授業の枠組みで持続的に実践を行うためには、時数や単元等制約を踏まえた多様な目的、目標、形態に対応するカリキュラム開発の必要性や、教員と外国人講師のコミュニケーションのあり方に係る課題が明らかとなった。

## 6. 結論

中学校の授業で生徒が外国人講師と遠隔で話し、英語コミュニケーション機会を拡充することによって、生徒の会話力並びに英会話や学習への意欲は有意に向上することが確認された。

今年度は、授業での実践の幅を広げるため、公立・私立の中学校数校を募り、各校の年間指導計画に基づいた実践を行っている。

引き続き、実践的なコミュニケーション能力を高めていく手段として、オンライン英会話の学校への普及を図っていきたい。

## 7 参考文献

投野由紀夫・福與喜弘(2014)「ICTとCEFR-Jを活用した小学校英語活動:NTT『教育スクウェア×ICT』の成果」,全国英語教育学会H24年度全国大会.

三田薫(2014)「スカイプ英会話を活用した短期大学英語授業の試み」,実践女子短期大学紀要(35).

## 謝辞

実践校である千歳市立勇舞中学校の大畑洋平教諭(現 新篠津村立新篠津中学校),風間託教諭,大西智彦教諭,授業アドバイスをいただいた同志社中学校の反田任教諭に深く感謝致します。